



〔翻 訳〕

ババッド・タナ・ジャウイ (1)

第1部 ババッド・パジャジャラン

深 見 純 生

訳 者 序 言

本稿はいわゆるメインスマ Meinsma 版『ババッド・タナ・ジャウイ *Babad Tanah Jawi* (ジャワ国縁起)』の冒頭部分の翻訳である。ローマ字化されたジャワ語原文〔Ras 1987a〕からの翻訳であるが、随時オルトフ W. L. Olthof によるオランダ語訳〔Ras 1987b〕を参照している。刊行された『ババッド・タナ・ジャウイ』ではいわゆるバライプスタカ Balai Pustaka 版がもっとも真正性が高いとされる。しかしこれはジャワ文字ジャワ語の韻文であるため、現在の訳者の能力をこえているので、国際的にもっともよく利用される、散文であるメインスマ版を訳出することとした。

訳文は原文に忠実な逐語訳とはせず、読みやすさを重視した。ただし文の順序を入れ換えるほどの改変はしていない。結果的に段落の区切りをジャワ語原文よりもオランダ語訳に従った場合が多いが、どちらにも従っていない場合もある。訳注は最小限に留めた。

ジャワ語の辞書では Pigeaud 1938 の全面増補版である Albada 2007 が不

* 本学国際教養学部

キーワード：ババッド, ババッド・タナ・ジャウイ, マタラム,
パジャジャラン

可欠であり、この辞書なくしてはとうてい読めなかったであろう。またガジャマダ大学文化学部のスハルトノ Suhartono 教授にご教示いただいた部分もある。

本稿は桃山学院大学2008年度特別研修の研究成果の一部である。

解 題

1. 『ババッド・タナ・ジャウイ』

ババッド babad はイスラム時代のジャワにおける史伝のことである。英語では history あるいは chronicle の語があてられる [Robson 2002: 62]。特定の歴史的出来事や個人の伝記のこともあるが、王国あるいは王家の史伝にババッドを称するものが多い。ババッドの語に「(森を) 開く」の意味もあり、史伝の作成と国を建てることの間にある不可分の関係を示唆するとされる。ただし王国や王家の史伝がすべてババッドを称するわけではなく、スラット Serat やスジャラ Sejarah などと称するものもある。

ババッド作成の起源ははっきりしないが、17世紀前半には祖型と見なしうるものが存在したといわれ、アラブなど外来の歴史伝統の受容によるものではなく、『パララトン Pararaton』¹⁾ などジャワの文化伝統に根ざすものと考えられている。

メインスマ版など少数の例外を除いて韻文である。もともと宮廷詩人が朗詠するものであり、王と王家の正統性を謳う機能をもつものであった。18～19世紀のジャワとその周辺でそれが書き留められ、書き継がれた。現存する写本は古くて18世紀のものである。

ババッドの内容は大きく二層に分かれる。第一は神話伝説である。預言者アダムに始まり、インドの神々やジャワの開闢へと続くこともめずらしくない。神々、精霊、悪魔、武人たちの伝説に満ちている。イスラム時代以前の諸王国が語られることも多い。その内容は近代的な歴史学の成果と

あまり接点を持たないが、ジャワがおかれていた一般的な事情について、またババッドが語られた当時の歴史観や世界観を知る手がかりとしては重要である。

第二は17世紀以後の歴史的出来事である。特定の王、王国、英雄、あるいは一連の出来事を中心とする語りである。歴史研究者は他の諸史料（とくにオランダ語の文書）と突き合わせることで、これらの史料としての有効性を証明してきた。たとえば、1740年代の動乱の時代について我々は Remmelink 1994; Ricklefs 1998; Aminuddin 2003 というすぐれた3つの研究を持っている。こうした研究において、他の諸史料と同じく、ババッド類が作成された社会的、文化的、また政治的な背景への十分な配慮が必要なのは言うまでもない。なかでも Ricklefs 1998 は文化的背景に重点を置いた研究である〔深見 2003a 参照〕。

1570年代に興った²⁾ マタラム王国の史伝である『ババッド・タナ・ジャウイ』は、まさにこの二層からなり、預言者アダムから18世紀の出来事までが語られている。今回翻訳したのは第一層に属する部分であり、全124章のうちの、ババッド・パジャジャラン Babad Pajajaran として括られることのある最初の4章である。

メインスマ版の原文には一見してわかるような明瞭な区切りは存在せず、したがって章のタイトルも存在しない（図1参照）。バライプスタカ版でも本文自体には韻律の変わり目以外の区切りはみられず、章のタイトルも存在しない。全124章に区切り、各々にタイトルをつけたのはバライプスタカ版の編集者である。ラスがメインスマ版の第5版の刊行（1987年）の際に、124章との対応関係を示しており〔Ras 1987b: LV-LXIII〕、本稿はこれに従っている。なお、このことからわかるように、メインスマ版とバライプスタカ版は、『ババッド・タナ・ジャウイ』の多数存在するバージョンのなかで、同一系統のテキストに属する。この系統は大ババッド Grote

図1 メインスマ版（ローマ字版）冒頭部分〔Ras 1987a: 7〕

書名も章立てもなく本文で始まる。

Poenika sedjarahipoen para ratoe ing tanah Djawi, wiwit saking nabi Adam, apepoetra Sis. Esis apepoetra Noertjahja. Noertjahja apepoetra Noerasa. Noerasa apepoetra sanghyang Wening. Sanghyang Wening apepoetra sanghyang Toenggäl. Sanghyang Toenggäl apepoetra batara Goeroe. Batara Goeroe apepoetra gangsal, anama batara Sambo, batara Brama, batara Maha-Déwa, batara Wisnoe, déwi Sri. Batara Wisnoe waoe djoemeneng ratoe wonten ing poelo Djawi, adjedjoeloek praboe Sèt. Kadatonipoen batara Goeroe anama ing Soera-Laja.

Batara Goeroe waoe kagoengan sengkeran poetri ajoe ing negari Mendang. Karsanipoen, badé kainggahaken ing swarga sarta kada-

Babad (Major Babad) と通称される〔Ras 1987b: XIV-XIX〕。

『ババッド・タナ・ジャウィ』の全体の構成などについての解説は今後順次取り上げるが、今回の冒頭の4章をババッド・パジャジャランとして括ったのは、ラスによれば、ブランデス J. L. A. Brandes [1920: 205-206] であり、ジャワの伝統に従うものであった〔Ras 1987b: XXVII-XXVIII〕。ブランデスおよびラスによれば、パジャジャラン王国の滅亡までを扱うババッド・パジャジャランや、これに続くババッド・マジャパイト Majapait, ババッド・ドゥマック Demak, ババッド・パジャン Pajang などのタイトルは、書名として扱うのが可能であるが、本来は書物のタイトルというより、内容あるいは時代を大まかに示す標目である。

なお、パジャジャランは、現在一般的なジャワ（あるいはインドネシア）

の歴史叙述においてマジャパイトと並立する西部ジャワの王国であるが、『ババッド・タナ・ジャウイ』ではマジャパイトに先行する王国とされている。

注

- 1) パララトンについては深見訳 2003c, 2003d, 2003e 参照。この拙訳に際して英訳の存在を知らなかったが、じつは新発見写本に基づく英訳 Phalgunadi 1996 がある。
- 2) マタラム王国の建国年次については諸説あるが、1578年説が有力である〔深見 2011〕。

参 考 文 献

- Albada, Rob van en Th. Pigeaud 2007 *Javaans-Nederlands Woordenboek*, KITLV Uitgeverij, Leiden.
- Aminuddin Kasdi 2003: *Perlawanan Penguasa Madura atas Hegemoni Jawa: Relasi Pusat-Daerah pada Periode Akhir Mataram (1726-1745)*, Yogyakarta.
- Brandes, J. L. A. 1920: *Pararaton (Ken Arok) of het Boek der Koningen van Tumapel en van Majapahit*, 's-Gravenhage/Batavia (VBG 62).
- ENI *Encyclopaedie van Nederlandsh Oost-Indië*, 8 Vols., Martinus Nijhoff & Brill, 1917-1939.
- Phalgunadi, I Gusti Putu 1996: *The Pararaton: A Study of the Southeast Asian Chronicle*, Sundeep, New Delhi.
- Pigeaud, Th. 1938: *Javaans-Nederlands Handwoordenboek*, Groningen & Batavia.
- Ras, J. J. ed. 1987a: *Babad Tanah Jawi: De prozaversie van Ngabehi Kertapradja voor het eerst uitgegeven door J. J. Meinsma en getranscribeerd door W. L. Olthof*, Foris.
- Ras, J. J. ed. 1987b: *Babad Tanah Jawi: Javaanse rijkskroniek: W. L. Olthofs vertaling van de prozaversie van J. J. Meinsma lopenden tot het jaar 1721*, Foris.
- Rommeling, W. 1994: *The Chinese War and the Collapse of the Javanese State, 1725-1743*, Leiden.
- Ricklefs, M. C. 1988: “Babad”, *Encyclopedia of Asian History*, New York and London, I: 119.
- Ricklefs, M. C. 1998: *The Seen and Unseen Worlds in Java 1726-1749: History*,

Literature and Islam in the Court of Pakubuwana II, Honolulu.

Robson, Stuart and Singgih Wibisono 2002: *Javanese English Dictionary*, Hong Kong.

柴田紀男 1991「ババッド」土屋健治・加藤剛・深見純生編『インドネシアの事典』同朋舎：340.

深見純生 2003a「近世ジャワ宮廷の文化世界」『岩波講座東南アジア史 別巻 東南アジア史研究案内』岩波書店：63-67.

深見純生 2003b「18世紀ジャワ史に関する若干の研究と史料」未刊（見えない科研報告2003年12月20日

<http://www.h6.dion.ne.jp/~kawan/mienai/20031220FUKAMI-rep.htm>)

深見純生訳 2003c「ケン・アンロク伝」『国際文化論集』（桃山学院大学）27：83-104.

深見純生訳 2003d「シンガサリ諸王伝」『国際文化論集』（桃山学院大学）28：109-127.

深見純生訳 2003e「マジャパヒト諸王伝」『国際文化論集』（桃山学院大学）29：305-324.

深見純生 2011「マタラムの建国年次について」『国際文化論集』（桃山学院大学）44：29-48.

凡例

1. 固有名詞などの初出にローマ字綴りを入れた。原文は旧綴りであるが、訳文では現在のジャワ語の綴り字法に従った。ただし、特殊記号を用いないこととしたため、eの3種類の音の違いは表現されない。
2. 2単語をハイフンで結んである固有名詞のカタカナ表記は、現在のインドネシアにおける慣用に従い、「・」を使わず1単語として扱う（例：ギリンウシ Giling-Wesi）。ただし、あまりに長くなる場合（おおむね5音節またはカタカナ7文字以上）は「・」を用いた。
3. 語末が開音節のaの場合、現在のジャワ語ではオと発音されるが、訳文ではアのままとした。煩雑と誤りを避けるためである。
4. [] は訳者による簡単な注記である。

ババッド・タナ・ジャウイ

第1部 ババッド・パジャジャラン

深 見 純 生

目次

1. アダムから神々までの系譜
2. ギリンウシのプラブ・ワトゥグヌン
3. バタラ・ウィスヌとバタラ・ブラマからパジャジャラン王国までのジャワの諸王の系譜
4. シユン・ワナラの運命

1. アダムから神々までの系譜

これはジャワの国の王たちの歴史であり、預言者アダム Adam に始まり、〔アダムに〕息子シス Sis がいた。シスに息子ヌルチャフヤ Nurcahya がいた。ヌルチャフヤに息子ヌラサ Nurasa がいた。ヌラサに息子サンヒャン・ウエニン sanghyang Wening がいた。サンヒャン・ウエニンに息子サンヒャン・トゥンガル sanghyang Tunggal がいた。サンヒャン・トゥンガルに息子バタラ・グル bathara Guru がいた。バタラ・グルに5人の子がいて、バタラ・サンボ bathara Sambo, バタラ・ブラマ bathara Brama, バタラ・マハデワ bathara Maha-Dewa, バタラ・ウィスヌ bathara Wisnu, デウイ・スリ dewi Sri といった。バタラ・ウィスヌはジャワ島に君臨し、プラブ・セット prabu Set と称した。バタラ・グルの王宮の名前はスララヤ Sura-Laya といった。

バタラ・グルは、ムンダン Mendhang 国の美しい王女を閉居させていた。

天国へともない、妃にするつもりであった。たまたま旅をしていたバタラ・ウイスヌが、ムンダンの王女を見て恋におちた。父親により閉居させられているとは知らずに妻にした。これはバタラ・グルを激怒させた。サンヒヤン・ナラダ sanghyang Narada が遣わされ、この怒りをバタラ・ウイスヌに落とし、王の地位から追い払った。こうしてバタラ・ウイスヌは都から退去し、森に入り7本のワリギン樹の下で苦行をした。妃のムンダンの王女は後に残された。

2. ギリンウシのプラブ・ワトゥグヌン

さてギリンウシ Giling-Wesi 国のこと。ワトゥグヌン Watu-Gunung と称する王が治めていた。2人の妃がいて、1人目をデウィ・シンタ dewi Sinta といい、2人目をデウィ・ランドゥップ dewi Landep といった。27人の子がいて、みなそろって息子であり、名前をウキル Wukir, クランティール Kurantil, トル Tolu, グンブレグ Gumbreg, ワリガリット Warigalit, ワリガグン Warigagung, ジュルンワンギ Julung-Wangi, スンサン Sungsang, ガルンガン Galungan, クニンガン Kuningan, ランキル Langkir, マンダシヤ Mandha-Siya, ジュルン・プジュット Julung-Pujut, パハン Pahang, クル・ウェルット Kuru-Welut, マラケ Marakeh, タンビル Tambir, マダンクンガン Madhangkungan, マクトル Maktal, プエ Puye, ムナヒル Menahil, プラン・バカット Prang-Bakat, バラ Bala, ウグ Wugu, ワヤン Wayang, クラウ Kulawu, ドククト Dhukut といった。すべてデウィ・シンタの子であった。

そのときギリンウシの国は疫病の猖獗に見舞われた。おおぜいの小さき者が倒れ、飢えが広がった。日食や月食がしきりにおこった。季節外れの雨が降り、1日に7度も地震があった。このすべては、ギリンウシの国の滅亡の前兆であった。

プラブ・ワトゥグヌンは国民が倒れていくのを見てとても心を痛めた。王は象牙の寝床に横たわり、妃デウィ・シンタは髪を虱を取っていて、王の頭の傷跡を見つけると、そのわけを尋ねた。王はこうこたえた。まだ子どものときのこと、母親がご飯を冷ましている時にうるさくねだったので、しゃもじで血が流れるほど叩かれた。こうして家をさまよい出た。

デウィ・シンタは王の言葉を聞いて衝撃のあまり、ものが言えなかった。しゃもじで叩かれて出ていったきり戻ってこない息子のことを思い出していた。王の話と同じだった。実の子の妻にされたことに悲嘆にくれ、王から自由になる手だてを求めて考えこんだ。

すっかり黙りこんでしまい、そのわけを訊かれたデウィ・シンタはこたえた。黙っていた間ずっと、王様の高貴さの完全なことを思っていました。ひとつだけ欠けるものがございます。この足りないものは、王様がまだスララヤの天女と結婚なさっていないこととございます。デウィ・シンタの思惑はこうだった。王がスララヤの天女に求婚したなら、きっと戦争が起り王は死に至るだろう。これが夫から自由になる道である。

プラブ・ワトゥグヌンはこのように聞かされるや、スララヤに昇り天女に求婚することにした。ただちに重臣たちと27人の息子たちに兵を集めるよう命じ、王はスララヤをめざして出立した。

バタラ・グルは、ギリンウシの王がスララヤに昇ってくると聞くと、神々を呼び集めた。そしてプラブ・ワトゥグヌンにあえて立ち向かう者はいないか尋ねた。みな一様に尻ごみした。そこでサンヒャン・ナラダがバタラ・グルに、ご子息のバタラ・ウイスヌを呼び出し、もしギリンウシの王に打ち勝つことができたなら、すべての罪を赦すと約束されますよう、なにしろ、プラブ・ワトゥグヌンに立ち向かうことができるのはバタラ・ウイスヌを置いていないのですからと言上した。

バタラ・グルはこれを許した。そこでサンヒャン・ナラダは、バタラ・

ウィスヌを捜そうとスララヤから降りていった。

サンヒャン・ナラダは、7本のワリンギンの下で苦行しているバタラ・ウィスヌに会うと、先述のようなバタラ・グルの命令を伝えた。

バタラ・ウィスヌはギリンウシの王を撃退すると約束したが、その前に家に戻り妻に別れを告げる許しを求めた。サンヒャン・ナラダは7本のワリンギンの下で待つよう言われた。

こうしてバタラ・ウィスヌはそこを去って妻を捜しにいった。かつてあとに残されたとき、彼女は身ごもっていた。バタラ・ウィスヌはうまれたのが男の子ならスリガティ Srigati と名づけるよう命じていた。男の子がうまれると、この子に夫の指示どおりの名前をつけた。時をへて成人すると、容貌秀丽であった。

さてそこにバタラ・ウィスヌが妻と子に会いにきた。バタラ・グルに命じられてスララヤに昇り、ギリンウシの王に立ち向かうと妻に伝えた。息子は一緒に行きたがったが、バタラ・ウィスヌは許さなかった。妻に別れを告げると立ち去り、7本のワリンギンの下でサンヒャン・ナラダに会った。

残されたラデン・スリガティは父の後を追った。7本のワリンギンにくと、父の後ろに座った。サンヒャン・ナラダは、これがバタラ・ウィスヌの息子であり、スララヤについて行くつもりであるとわかると、バタラ・ウィスヌに息子を連れて行かないよう助言した。それはきっとバタラ・グルの逆鱗に触れるだろう。

息子は家に戻るよう命じられた。サンヒャン・ナラダはバタラ・ウィスヌとともにいそいでスララヤへ向かい、ラデン・スリガティは7本のワリンギンの下に残された。

サンヒャン・ナラダとバタラ・ウィスヌはスララヤに着いた。ともにバタラ・グルに伺候し、楽しく語らっていると、まもなく残してきたスリガ

ティが父の後を追って、神々の住処に至り、父の後ろに座った。バタラ・グルは見目麗しい若者がバタラ・ウイスヌの後ろに座っているのを見ると、それが何者かサンヒャン・ナラダに尋ねた。

ナラダは、バタラ・ウイスヌがムンダンの王女との間にもうけた息子だと伝えた。バタラ・グルはこの言葉を聞くと激怒し、謁見場から立ち宮廷の中に入ってしまった。ナラダは、バタラ・グルが怒っていると知って、後を追った。

バタラ・グルはサンヒャン・ナラダに、バタラ・ウイスヌの息子に死を命じ天国への捧げ物にせよ、あわせてバタラ・ウイスヌにただちに敵への進撃を下命せよと命じた。

バタラ・ウイスヌはこの命令を受けると、息子に死が命じられるのなら、敵に立ち向かう気はないと答えた。サンヒャン・ナラダはバタラ・グルに、バタラ・ウイスヌの答えがどんなものかを伝えた。そのとき外で騒ぎが起こり、「敵が来た!」と叫びがあがった。バタラ・グルは恐れおののき、サンヒャン・ナラダに何とかするよう求めた。

サンヒャン・ナラダは、もしスリガティを殺したいという願いをお捨てにならないなら、バタラ・ウイスヌは戦いに立つのを拒み、スララヤの陥落は必定でございますと申し上げた。バタラ・グルはサンヒャン・ナラダの助言に従い、スリガティを殺すことを思いとどまり、そしてバタラ・ウイスヌに敵に立ち向かうよう命じた。

バタラ・ウイスヌは息子とともに、ギリンウシの王と対戦するために神々の住処を去った。プラブ・ワトゥグヌンと対面すると、王はバタラ・ウイスヌに、戦いを交えるまでもないのではと申しでた。もし謎を解くことができれば自分の負けで、喜んで殺されよう。しかし解くことができなかったら、スララヤの神々はすべて降伏し、天女はみな引き渡され、我が妻となる。

バタラ・ウィスヌはこの申しでに同意した。そこで王は謎を口にした。
「小さい植物で大きな実は何か、大きい植物で小さい実は何か」

この謎にバタラ・ウィスヌは答えた。「小さい植物で大きな実、それは西瓜である。大きい植物で小さい実はワリンギンである」

王は謎が解かれたとわかって一言も発せなかった。バタラ・ウィスヌのチャクラ cakra〔円形の武器〕によって首を刎ねられた。王の軍勢はみな慌てて散り散りに退いた。

プラブ・ワトゥグヌンが死ぬとデウィ・シンタは号泣し、その轟音はスララヤにまで響き、神々を不安に陥れた。バタラ・グルはサンヒャン・ナラダにこの轟音の原因を訊ねた。サンヒャン・ナラダは、プラブ・ワトゥグヌンの死を悲しむデウィ・シンタの泣き声からこの轟音が生じると答えた。バタラ・グルはサンヒャン・ナラダに、デウィ・シンタのところに降りて泣くのをやめさせよ、3日以内にプラブ・ワトゥグヌンを生き返らせ、下界に下ろして再びギリンウシの王にすると約束せよと命じた。

サンヒャン・ナラダはバタラ・グルの言葉をデウィ・シンタに伝えた。デウィ・シンタは泣くのをやめ、たちまち大轟音は鎮まった。3日が過ぎプラブ・ワトゥグヌンがまだ戻らないのでデウィ・シンタは再び泣き始め、轟音を響かせた。前回をしのぐ激しさだった。

バタラ・グルは再びサンヒャン・ナラダに、轟音のわけを訊ねた。サンヒャン・ナラダは、この轟音を起こしているのはまたもデウィ・シンタで、3日の期限が過ぎたのに、プラブ・ワトゥグヌンがまだギリンウシの国に戻らないからだと答えた。バタラ・グルはサンヒャン・ナラダに、プラブ・ワトゥグヌンを生き返らせてギリンウシの国に戻らせるよう命じた。

プラブ・ワトゥグヌンがサンヒャン・ナラダによって生き返り、ギリンウシの国に戻るよう命じられると、天国が気に入ってしまったので、それを望まなかった。2人の妻と子をみな天国の自分のもとに呼び寄せてほし

いと懇願した。バタラ・グルはこの乞いを許し、妻と子をみな天国に来させるよう命じた。日曜日ごとに1人ずつ受け入れられた。これが30のウク wuku¹⁾の始まりである。

3. バタラ・ウィスヌとバタラ・ブラマからパジャジャラン王国までのジャワの諸王の系譜

サンヒャン・ナラダのバタラ・グルへの進言によって、バタラ・ウィスヌはマルチャパダ Marcapada〔地上〕に降ろされ、精霊の王となって8つの場所を支配した。ムラピ Merapi 山、パマンティンガン Pamantingan, カバレヤン Kabareyan, ロダヤ Lo-Daya, クウ Kuwu, ウリンギン・ピトゥ Wringin-Pitu, カユ・ランデヤン Kayu-Landheyan, ロバン Roban である。

バタラ・ブラマはマルチャパダに降ろされ、ギリノウシの国で王となり、ブラブ・ワトゥグヌンを継いだ。ジャワの島は服従した。やがてバタラ・ブラマは娘をえて、ブラマニ Bramani と名づけた。ブラマニに息子トリ・トルスタ Tri-Trustha がいた。トリ・トルスタに息子パルクナン Pari-Kenan がいた。パルクナンに息子マヌ・マナサ Manu-Manasa がいた。マヌ・マナサに息子サクトルム Sakutrem がいた。サクトルムに息子サクリ Sakri がいた。サクリに息子パラサラ Pala-Sara がいた。パラサラに息子、隠者アビヤサ Abi-Yasa がいた。隠者アビヤサに息子パンドゥ・デワナタ Pandhu Dewa-Nata がいて、アスティナ Astina で王であった。パンドゥ・デワナタに息子アルジュナ Arjuna がいた。アルジュナに息子アビマニュ Abi-Manyu がいた。アビマニュは戦場に没し、臨月の妻がいた。息子が生まれ、パルクシット Pari-Kesit と名づけられ、やはりアスティナの国で王になった。ブラブ・パルクシットに息子ユダヤナ Yuda-Yana がいた。ユダヤナに息子グンドラヤナ Gendra-Yana がいた。グンドラヤナに息子ジャヤバヤ Jaya-Baya がいた。そのあと王国は消滅した。

クディリ Kedhiri のジャヤバヤに息子ジャヤ・ミジャヤ Jaya-Mijaya がいた。ジャヤ・ミジャヤに息子ジャヤ・ミセナ Jaya-Misena がいた。ジャヤ・ミセナに息子クスマ・ウィチトラ Kusuma-Wicitra がいた。クスマ・ウィチトラに息子チトラソマ Citra-Soma がいた。チトラソマに息子パンチャ・ドリヤ Panca-Driya がいた。パンチャ・ドリヤに息子アンリン・ドリヤ Angling-Driya がいた。アンリン・ドリヤに息子プラブ・サウエラ・チャラ Sawela-Cala がいて、ジャワの国に君臨した。その都はブルワチャリタ Purwa-Carita にあった。

プラブ・サウエラ・チャラに息子スリ・マハプングン sri Maha-Punggung がいた。そのパティ patih〔宰相〕はジュグル・ムダ Jugul-Mudha だった。スリ・マハプングンに息子カンディ・アワン Kandhi-Awan がいた。そのパティはコンタラ Konthara といった。カンディ・アワンに5人の子がいた。長子はパヌフン Panuhun といい、農民の王となり、パグレン Pagelen に宮廷があった。2番目はサンダン・ガルバ Sandhang-Garba といい、商人の王で、ジュパラ Jepara に宮廷があった。真中はカルンカラ Karung-Kala といった。森をさまようのを好んだ。獵師の王となり、プランバナン Prambanan に宮廷があり、ラトゥ・バカ ratu Baka と称した。次をトゥングル・ムトゥン Tunggul-Metung といった。ヤシ酒を取るのが好きだった。職人の王となった。最後はルシ・ガタユ rsi Gathayu といい、父の跡を継ぎ、コリパン Koripan で王となった。4人の兄弟はみな服従した。

ルシ・ガタユに5人の子がいた。長子は娘で、ララ・スチヤン rara Suciyan といった。2番目はルンプ・アミルフル Lembu-Amiluhur といい、ジュンガラ Jenggala において王になった。真中はルンプ・プトゥン Lembu-Peteng で、クディリにおいて王になった。次はルンプ・プンガラ Lembu-Pengarang といい、ググラン Gegelang において王になった。最

後は娘でニ・ムルギ・ワンサ ni Mregi-Wangsa といい、シンガサリ Sanga-Sari の王ルンプ・アミジャヤ Lembu-Amijaya と結婚した。

ルンプ・アミルフルに息子パンジ Panji がいて、クディリの王女デウィ・チャンドラ・キラナ dewi Candra-Kirana 別名デウィ・ガル dewi Galuh と結婚した。パンジに息子クダ・ラレヤン Kuda-Laleyan がいて、バジャジャラン Pajajaran で王になった。プラブ・ラレヤンに息子バンジャラン・サリ Banjaran-Sari がいた。バンジャラン・サリに息子ムンディン・サリ Mundhing-Sari がいた。ムンディン・サリに息子ムンディン・ワンギ Mundhing-Wangi がいた。ムンディン・ワンギに息子スリ・バムカス sri Pamekas がいた。スリ・バムカスに息子アルヤ・バンガ arya Bangah とラデン・ススル raden Susuruh がいた。アルヤ・バンガはガル Galuh において王となった。ラデン・ススルはバジャジャラン国の王になることになっていた。

4. シユン・ワナラの運命

さて1人のアジャル ajar〔賢者〕がいて、バジャジャランの山で苦行し、名をアジャル・チュパカ ajar Cepaka といった。予知能力で有名で、まだ起こっていないことをすでに知っていた。この話が王に伝えられると、王はキヤイ・アジャルの能力を試したいと、パティに側女をつれて山に行き、キ・アジャルに会うよう命令した。側女はあたかも妊婦のように腹部に大きな鉢をいれさせ、キヤイ・アジャルにお腹の子の男女を当てさせようというのである。

パティは山への道をたどり、キ・アジャルに王の命令を伝えた。キヤイ・アジャルは自分の能力が王に試されていることを悟った。お腹の子は男の子だろうと答えた。

パティが王に報告すると、王はアジャルが嘘をついたと大喜びし、側女

に長衣を脱がせてみると、大鉢はなくて、本当に妊娠していた。王は激怒し、アジャルを殺すよう命令した。キ・アジャルが死ぬと、王に声が聞こえた。「おお、バジャジャランの王よ、わしは罪なくしてお前に殺された。いずれお前に仕返ししてやる。シユン・ワナラ Siyung-Wanara という男が現れたら、それがわしの仕返しだ」

その後バジャジャラン王国は激しい疫病の猖獗に見舞われた。大勢の人が死に、王はとても心を悲しませた。占星術師たちを呼びだし、疫病の対策を尋ねた。占星術師たちは申し上げた。王様はごちそうで宴会をなさるのがよろしい。宴が終われば、女性と一夜をお過ごしなさいませ。これが疫病対策になりましょう。しかし、王様はやがて大きな災厄に見舞われ、側女がうんだご自分の子に殺されることになりました。

王は占星術師たちの助言を実行した。ごちそうの宴会が終わると、王はひとく酔っぱらい、そして側室と寝た。たまたまそれは、先のキ・アジャルに妊娠の謎をかけさせた女であった。やがて時が満ちて、妊婦は男の子をうんだ。王は占星術師たちの説明を思い出し、赤ん坊に毒を飲ませたが、効き目がなかった。切り刻もうとしたが、乳母たちがこれを妨げた。乳母たちは申し上げた。王様が赤ん坊を殺したい決意が固いのでしたら、箱に入れてクラワン Krawang 川に捨てられますように。王はこれを承知し、赤ん坊は箱に入れてクラワン川に流された。

水に流された箱は、クラワンのキヤイ・ブユット kyai buyut とよばれる釣り人に拾われた。箱を開けると、とてもかわいい赤ん坊が入っていた。キヤイ・ブユットはたいへん喜んで、家に連れて帰り妻に渡した。ニヤイ・ブユット nyai buyut は子がなかったので、とても幸せに思った。赤ん坊はよく世話された。大きくなると、キヤイ・ブユットが実の父と信じなくなり、本当のことを知りたいと強く願うようになった。キヤイ・ブユットはその願いを満たしてやりたいとの思いから嘘をついた。森の奥深くで苦行

をする親戚がいて、言われる前に物事がわかる。きっと願いをかなえてくれるだろう。この男に聞くがよい。キヤイ・ブユットは「若者が森に入りたいはずがない。遠いからだから」と考えていた。しかし思惑は外れた。若者は森に連れていってくれるよう頼んだ。2人が歩いていると、若者は猿〔ワナラ〕とシユン鳥を見た。キヤイ・ブユットにその名前を尋ねた。キヤイ・ブユットはその動物と鳥の名前を教えた。すると若者はそれを自分の名前にすることにした。こうして彼はシユン・ワナラという名になった。

道中すでに長くなったので、シユン・ワナラはその親戚の家のことを尋ねた。困ったキヤイ・ブユットは、若者を別の道へ導こうと、その親戚はパジャジャランの都に引っ越した。仕事は鍛冶師だと言った。シユン・ワナラは都を見ることができると思って、とても喜び、鍛冶師の家に連れていってくれるよう頼んだ。キヤイ・ブユットはこれに応じた。鍛冶師の家に到着すると、シユン・ワナラは託され、キヤイ・ブユットは戻っていった。

鍛冶師の家にいてシユン・ワナラは鍛冶を習った。すぐに膝を鉄床、拳を金槌、指をやっとこととして使うことができた。たくさん人がシユン・ワナラの超能力を見ようと鍛冶師の家におしかけてきた。

ある日シユン・ワナラは鍛冶師とともに市場に行った。パジャジャランの王の象がちょうど水浴びをしていた。象はシユン・ワナラを見ると、近づいてきて、その前でお辞儀をした。言葉をしゃべることができたなら、きっとこう言っただろう。「ご主人様、どうぞお乗りください。貴方様のお父上、王様にごあいさつにお連れいたします」。シユン・ワナラは牙をなでてやった。これを見てみな驚いた。

さてパジャジャランの王は閲兵のため外に出ていて、一騎討ちをさせて楽しんでた。シユン・ワナラは見物した。鍛冶師は止めようとしたが、無駄だった。謁見場に上がるとシユン・ワナラは王の並びに座った。誰も

これが見えなかった。そして宮廷に入って、サウォ sawo の木でできた椅子の横に立ちどまった。このサウォの椅子は触れるとフルセットのガムラン gamelan のような響きをたてる。この椅子にシユン・ワナラが座った。轟音が響き、王をびっくりさせた。激怒して、椅子に触れている余計者をつかまえるよう命じた。マントリ mantri たちがかけより、サウォの椅子に寝そべるシユン・ワナラに襲いかかった。シユン・ワナラは飛び起きた。マントリたちははね飛ばされ、打ちのめされた。難を逃れた者は逃げ戻って王に報告した。王はシユン・ワナラの超能力を知って喜んだ。シユン・ワナラは召し抱えられ、しばしば軍隊を指揮して他国の征服に送り出された。そのたびに凱旋した。

王の覚えがたいへんめでたかったので、シユン・ワナラは地位が上がり、アルヤ・バニャックウィデ arya Banyak-Wide の名前と 1 万カルヤ karya²⁾ の采邑を与えられた。さらに養子に迎えられ、体刑と死刑に処する権限を与えられた。

アルヤ・バニャックウィデは大勢の鍛冶師を集めて、扉のある鉄製の寝台を作るよう命じた。完成し装飾を施すと、館の中に置いた。

あるときパジャジャラン国は敵に攻められ、王は勝利を得た。アルヤ・バニャックウィデは王に申し上げた。王様が戦いに勝利されたときには、自分の館に祝宴にお招きする誓いを立てておりましたと。王はこの招待を受け、アルヤ・バニャックウィデの館に出向き、ごちそうの祝宴に臨んだ。祝宴ののち、王は鉄の寝台を目にすると、アルヤ・バニャックウィデに、このような寝台を作ってどんな役に立つのか尋ねた。アルヤ・バニャックウィデは申し上げた。「この寝台は、疲れたときそこに寝ると回復いたします。熱いときは冷めますし、寒いときは暖かくなります。病人は健康になります」。王は試してみたくなり、鉄の寝台に横たわった。バニャックウィデは王が横になったのを見ると、寝台の扉を閉め、家来に寝台を担い

でクラワン川に投げるよう命じた。王は激怒し、どんな悪いことをしたか問うた。バニャックウィデは、まだ小さいときにクラワン川に投げられたので、いまこうして復讐するのだと答えた。鉄の寝台は本当に沈められた。

王の息子ラデン・ススルはこのことを知らされると、軍勢を集めてアルヤ・バニャックウィデを捕らえようとした。たちまち激しい戦いが起こった。バニャックウィデの軍勢の多くが、ラデン・ススルの奮戦のため命を落とした。バニャックウィデがラデン・ススルとの戦いに出てきた。両者は対峙した。ラデン・ススルは槍を投げられ、腹帯に当たって切り落とされた。ラデンは恥ずかしくまた怖くなって、後ずさりし、逃げだした。まっすぐ東に向かい、カリグンティン Kali-Gunting 村の未亡人の家に身を潜めた。ラデン・ススルは彼女の子として受け入れられた。

訳注

- 1) ウク wuku。ウクは30週（1週は7日）つまり210日を周期とするジャワおよびバリの暦法であり、今日でも日取りの吉凶占いに用いられる。とくにバリではウク暦にもとづく祭礼や行事が行われる。30週の名前は2人の妃シンタ、ランドゥップに始まり、27人の息子の名前が続き、第30週がワトゥグヌンである [ENI V: 405-406 参照]。
- 2) カルヤ karya。カルヤは農地 4 バウ bau のこと（1バウは0.70965ヘクタール）[Albada 2007: 339]。